

広く詳しく正確な情報・評論

エネルギー

E n e r g y R e v i e w

レビュー

2004. **6**

特集 原子力安全基盤機構

徹底分析 実のある「原子力広報」探る
ルポ 黄金の山々—ロシア連邦アルタイ共和国



黄金の山々ーロシア連邦アルタイ共和国

京都大学・原子炉実験所

古林 徹

アルタイには、黄金の山々という意味があるという。交通手段の発達や、近年のロシアの開放政策のお陰もあり、温暖な夏場は、比較的簡単に訪れることができる。ユーラシア大陸の中央という地理的な条件と、山と渓谷、森と川や湖などが美しい豊かな大自然は、世界的な観光地の一つとして、ますます発展することを予感させられる。自然の中は、人間が本来の特性に目覚めることができる場所の一つであろう。自己を見つめ直す機会を与えてくれた、忘れることができない旅行になった。

ユーラシアの「へそ」

アルタイ共和国は、ロシア連邦にある二一の「共和国」のひとつである。西シベリアの南部に位置し、北東はハカス、東はトゥイバのロシア連邦の両共和国である。また、南西にカザフスタン、南に中国、南東にモンゴルの国々と接している。共和国のかなりの部分を占めるアルタイ山脈は、これらの国境に広がる急峻な山々からなっており、最高峰は共和国国内にあるベルーハ山（四五〇六



ビースク市で立ち寄った修理工場

米)。各国にアルタイという地名がある。面積は北海道よりやや大きい九万二六〇〇平方キロメートル、人口は二〇万五五〇〇人（二〇〇一年統計）、首都はゴルノアルタイスクである。（アルタイ共和国公式サイト <http://www.altai-republic.com/> 参照）

国の真ん中は、北緯五一度、東経八七度あたりで、ユーラシア大陸のほぼ中央、人間に例えれば、ちょうど「へそ」の位置である。

モテモテの日本の中古車

昨年夏に訪問した研究所（BNP Budker Institute of Nuclear Physics）のあるノビシルスク市内で、多くの日本車を見かけた。故障の少ない日本車は、レンタカーでも人気があるようだ。大部分が中古車という。日本海に面するウラジオストックは、日本車の第二の故郷とい

う話を思い出した。現在のシベリア地方の足を日本が支えているように、自動車業界とは無縁の私でも誇らしく思った。

アルタイ共和国への訪問は、私のロシア訪問を受け入れてくれた研究者の家族が計画していたキャンプに、誘われるままに飛び入りで同行することによって実現した。参加したのは二組の研究者の家族である。私を含めて男六人、女三人が、オフロード仕様のワゴン車と、普通のセダン車の二台の自家用車に分乗した。車はともに日本製であった。途中タイヤ交換に立ち寄ったビースク市の自動車修理工場には、部品を取るための廃車の一時置き場に、数社の日本メーカーの名前が書かれていた。

厳しい交通取り締まり

首都のゴルノアルタイスクだけに空港があり、シベリア各地の主要都市と結ばれている。共和国内は、鉄道が無いので、自動車輸送が頼りである。国道や地方の幹線道路は全て舗装されているが、幹線道路から外れた町や村では多くが未舗装と聞いた。ロシア領の平坦なアルタイ地方



いづこも同じねずみ取り

を過ぎ、アルタイ共和国に入った途端に、検問所がやたらと目につき始めた。それぞれの村や町に一つという感じで設置されているようである。不審物や不審者の監視に加えて、信号がほとんど無いことから、スピード違反の取り締まりと、その罰金の徴収も大きな目的であるとのこと。道路整備などの財源として、連邦政府からの僅かな給付金を補う合法的な集金方法という理解があるという。

同乗したアルタイ共和国出身者の家族の車は、さすがに検問所で捕まることがなかったが、注意をしていたにもかかわらず「ねずみ取り」で罰金(一〇〇ルーブル、日本円で約四〇〇円)を支払った。



幹線道路の道端、男は左、女は右に無言で分かれた

ドライブ旅行するときの休憩に関する話である。シベリア地方でも道路網の整備に伴って、休憩所や売店などの施設も増えてきているという。しかし、必要なときに都合よくそれが見つかることは少なかった。必然的に、停車後すみやかに消えて、しばらくして集合するという行動になる。初めのうちは我が身の処し方だけで余裕がなかったが、ある種のマナーや配慮があることに気がついた。消える方向は、車が走ってきた方向であり、その先には岩場や木立、時には小川がある。これらに配慮して車を止める場所を決めている。

サイベリアン・マナー



たのであろう。いづれにしても重要なことは、状況にかかわらず、無言で、堂々と、しかもスピーディに進めることと理解した。人はどこでも同じような感性を持つのであろう。私が行った大概の場所には先人の「ん跡」が残されていた。

M-52号線 モンゴルに通じる

ゴルノアルタイスクから、モンゴルに通じている幹線道路M-52号線を南下した。道路沿いの小高い岩場の石の表面に、古代人が描いたといわれる多くのレリーフがあった。キャンプ用の食料補給に立ち寄ったオングダイ(Onguday)には、軍の駐屯地や市役所、ギリシャ正教のキリスト教会もあった。牛が遊ぶ広場に面したスーパーマーケットには、日常に必要なものは全て揃えてあった。掃除機や洗濯機もあり、一ルーブルを四円で換算すると日本とそう変わらなかった。常設の露店で見た売り子の少女は日本人そっくりで、英語が少し通じた。アクターシユ(Aktrash)でM

左：市場の売店の日本人によく似た少女(オングダイ)
下：セルフ式ガソリンスタンド(オングダイ)





古代人が岩に描いた鹿のレリーフ



峠の青空休憩所の土産売り



モンゴルに通じている幹線道路M-52号線





高低差約700mの「アルタイのいろは坂」と
チェリッシュマン川



夜明けの川と遠くの霧



清流で釣りを楽しむ少年達



河原で見つけたプライ
ダルベールに似た花



トゲの鋭い木になる赤い小さな
実。甘くビタミンCに富む



道ばたに生える食用キノコ
(シャンペリオン)



上：騎馬遊牧民の墓であるクルガン（石塚）のパジリク古墳群
左：急斜面を走る凸凹道の「いろは坂」

天然の関所のような切り立った溪谷を走り抜けると、その先には比較的平坦な盆地が広がっていた。ウラガン（Uragan）の近くの高原には、騎馬遊牧民の墓であるクルガン（石塚）のパジリク古墳群がある。さらに進むと広々とした草原に出た。地図に点線で示されている草原の道は、場所によっては三本の道が数十メートルで併走していた。草原は新たな道を通る自由も含めて、運転者の裁量で決められる自由がある道、フリーウェイであった。何人かの馬に乗った現地の人を見るのができたが、若者にはオートバイが人気のようだ。いずこも同じ後ろから抱きつくような格好で、年代物のバイクに乗った現地の若いカップルとすれ違った。草原を悠然と歩く

草原のフリーウェイ

52と別れ、キャンプ予定地であるチエリツシユマン川をめざした。この川は、アルタイの真珠と言われる共和国最大のテレツコエ湖に流れ込み、そこから流れ出るビヤ川は、共和国内を流れるカトウ二川と合流してオビ川となり北極海に達する。

放牧中の牛は、フリーウェイの唯一の停止信号である。

アルタイのいろは坂

草原の自由の道の先に待ちかまえていたのは、高低差約七〇〇メートルの未舗装の狭く急な坂道であった。日光ならぬ「アルタイのいろは坂」と勝手に命名した。道の表面は、雨水の流れた跡と、タイヤの溝が重なった凹凸状態に加えて、所々に鋭く尖った石が突き出していた。車高を高くするため、運転手以外は徒歩になった。七時半頃下り始め、溪谷の底に着いたのは八時半過ぎ、薄暗くなっていた。直感的に、車高の低いセダン車が帰り道で「ここを無事に上れるだろうか」と心配になった。

三日後の帰り道、坂道の登り始めにある急斜面の所で、セダン車は路面に車体を接触させ、動かなくなつた。ロープで数回引つ張つたが、二台とも車輪が空回りして動かない。ただ一人同乗していたゲスト扱いの私は、牽引開始時に車を持ち上げればいけそうだと提案し、その役目を買ってでた。動きだせば急な坂の部分が終わる約一キロ先まで、一気に走るよう打ち合わせていたことから、最後尾を一人で歩くことになつ

た。何度か立ち止まりながらも、できるだけ早足で歩いた。貢献できたという充実感から心は軽かった。私の働きに対する心のこもった感謝、素朴な人情など、忘れ難い思い出となった。

アルタイの星降る夜空

目的のキャンプ地に着いたのは夜の九時過ぎであった。薄暗い中で男達はすぐにテントの設営と薪集め、女達は食事の支度と、役割分担を黙々とこなしていく。夏の高緯度地方は遅くまで明るい、夜の一〇時を回るとさすがに暗闇となった。たきぎの明かりの中でパン、チーズ、



巨大な飯盒。食後の紅茶もこれで楽しむ

サラミソーセージ、キュウリの夕食を取った。疲労回復に絶大な効き目があるという生ニンニクをアテに、本場のウオツカをちびりちびりと勧められるままに飲む。その甲斐あつてか、長時間のドライブで疲れているはずなのに、疲れや眠気は感じなかった。初めて食べた生ニンニクは、口の中がびりびりと燃えるように辛かった。

このような状況下の行動の基本は、可能な限りみんなと同じことをすることである。同行者の持参したギターに合わせて歌い、本日の無事を喜び、夏の一夜を楽しんだ。ロシア風のもてなしや配慮に満ちた対応に、今までに感じたことのない安らぎを覚えた。寝る直前に、木立の間から見えたアルタイの真夜中の空には、驚くほど多くの星が見えた。

早朝の癒しの風景

薄暗い内に目覚めて時計を見るとまだ五時であった。二十数年振りのテント生活であったが、不思議と違和感は無かった。六時に川沿いの高台に張ったテントをはい出し、一人で散歩に出かけた。渓谷は既に十分明るい、谷底故に直接朝日は見えない。足下に注意しながら河原をし

ばらく歩くと、今まで見たことがない素晴らしい景色が広がっていた。朝の澄んだ空気、快晴に近い空、渓谷ではまれな無風状態、これらと川の流れる音が他の音を掻き消したのか、快い静けさを感じることができた。

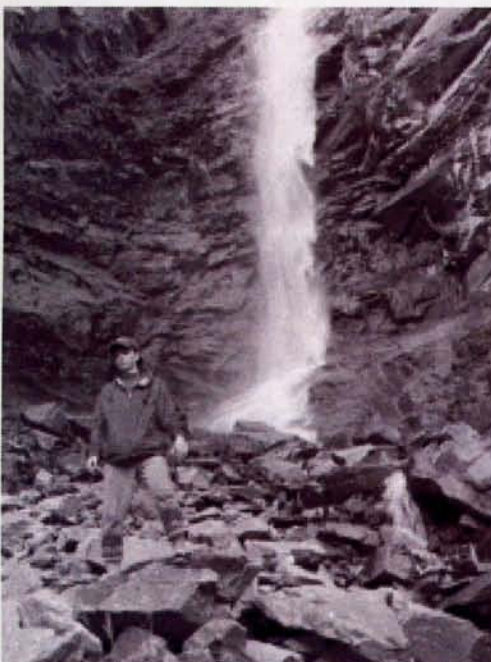
人によって「早い遅い」はあつても、現在の平均的な日本人には、五〇歳前後で「人生の転機」という風が吹き始めるのであろう。私もここ数年、時間があると考え込むことが多かったが、この大自然の中で、自分を見つめ直す糸口をつかんだような気がした。

忘れがたい ナターシャの夢

人はどこから来てどこへ行くのだろうか。キャンプには、一九歳になるナターシャという才色兼備の女性がいた。初対面でいきなり、「こぼやしさん、こんにちは。私はナターシャと申します」と、きれいな発音の日本語で挨拶された。驚かされたこと以上に、説明しがたい楽しい気分を味わった。彼女の母親は、「いろはかるたに関する日本文化の研究」で博士号を持っており、日本語の通訳もできる人である。ナター



チェリッシュマン川をバックにした同行者達



滝の前に立つナターシャ

シャと父親は、毎朝バレーボールを楽しんでいたが、父の娘に対する万国共通の思い入れが、ひしひしと伝わってきた。今回の旅行は、ゆっくりとした時間を思い思いに楽しむことを基本にしていた。目的地での二日間であったことは、四〇分ほど離れたところにある滝の見学と、川に沿っ

て往復一〇分ほど散歩したことであった。道中では、野生の果実を食べ、キノコ狩りをし、野生の植物を観察するなど、今、共に平和に生きていることの喜びを感じた。

夢には、願望が夢になる楽しい夢も、見たくない夢もある。半年位してナターシャの夢を見た。舞台はアルタイの滝の見学の帰り道であつた。道中にある急な斜面をやつたのおもいで登り、先に登って待っているはずのナターシャを探していた。

ここには、夕日に照らし出されたアルタイの黄金の山々が、静かに横たわっていた。あまりにも美しい光景にしばらく見とれていた。ふと足下に目を移すと、淡いピンクのブライダルベールのような花が咲いているのが見えた。

しばらくして彼女の母親からきた日本語のメールには、交通事故でナターシャが天に召されたことが記されていた。しばらくの間、こみ上げる涙でメールを読み返すことができなかった。